

## 平成二十三年年度年史企画展

# 「目をはなすな 手をはなせ——久井忠雄没後二〇年記念展」の記録

### 年史編纂室

#### 一 展示の主旨と開催期間について

昭和二十七年（一九五二）、学校法人関西大学の評議員に選出されると同時に専務理事に就任し、平成三年（一九九一）に現役の理事長として他界するまで、関西大学の舵取りに全力を傾けた久井忠雄が亡くなって二〇年になるのを記念して、年史資料展示室では、平成二十三年度の企画展として「目をはなすな 手をはなせ——久井忠雄没後二〇年記念展」を開催した。

平成二十三年（二〇一一）四月一日から翌平成二十四年三月末日までの開催期間中、日曜、祝日および大学が定める休日は閉館したが、校友会のスプリングフェステ

イバルや教育後援会総会、オープンキャンパスなどの行事開催日には開館した。さらに平成二十三年度からは、それまで閉館していた土曜日も開館するようになった。

しかし、年史資料展示室のある簡文館で耐震補強工事が行われることが急遽決まったので、七月一日から九月末日までは休館した。そのため、八月に二回、九月に一回行われたオープンキャンパスでは公開することができなかった。この間、展示品はすべて収蔵庫に収納するとともに、事務室も教育会館別館に移転して業務を続けた。耐震補強工事終了後、展示品を元に戻す作業を行い、十月十一日に再開館したので、十一月に行われたオープンキャンパスには、年史資料展示室を公開することがで



れ、私立大学全体の発展にも寄与しました。このように久井忠雄の手腕ぶりを今に伝わる事跡の中で探せば、枚挙にいとまがありません。

一方、流行している事柄やことばなどを織り交ぜたスピーチは聴衆に深い感銘を与え、魅了しました。特に親子関係のあり方については、家庭こそがその礎という考えに基づき『目をはなすな 手をはなせ』という言葉で端的に表わしました。』

ちなみに、今回、企画展のタイトルは、この久井忠雄語録よつている。

### 三 展示の内容

企画展示室では、主として現物資料を展示するための大型ケース一基と写真パネル用の展示台を設けている。さらに、壁面を利用して数点の解説パネルを掲げるようにしている。

#### 壁面解説パネル

企画展示室を入ると、「ごあいさつ」の横に大型パネル一枚を掲げ、さらに、大型展示ケースを挟んで、壁面に中型パネル二枚を設置した。

大型パネルには「久井忠雄の関西大学への貢献」というタイトルを付け、さらに五つの項目に分けた上で写真を入れ、久井忠雄が果たした功績を解説し、あわせて略年表も付けた。

#### 大型パネル「久井忠雄の関西大学への貢献」

##### 〔解説〕

##### 一、積極経営

昭和二十七年（一九五二）、専務理事に就任した久井は、白川朋吉理事長のもとで積極財政経営を旗印に、就業規則の全面的な改定や給与規定の作成、教員対象の海外留学制度、学内年金制度の整備などを行い、時代を先取りした制度構築の陣頭指揮をとつた。

本学は戦前の緊縮財政で莫大な積立金を残したが、戦後のインフレで紙くず同然と化してしまった。こ



大型パネル「久井忠雄の関西大学への貢献」

の教訓から「貯金で失敗したのだから、今度は借金をして先手を打とう」が当時の合言葉となった。こうして昭和三十年（一九五五）、創立七〇周年の記念事業として行われた法文学舎の大改築を皮切りに、久井は次々と学舎の増改築を断行した。

## 二、波乱

昭和三十三年（一九五八）、名神高速道路の建設にあたり、日本道路公団は千里山キャンパスを横断させる計画を立てた。大学では理事会、校友、学友会が一丸となって反対を続けた。久井も校友の国会議員などに働きかけ、計画を中止するよう協力を要請するとともに、陳情に奔走した。

昭和三十七年（一九六二）六月十六日、紆余曲折であったものの、半トンネル方式を採用することでキャンパス内通過を認め、公団、関西大学、建設省の三者は覚書に調印した。

久井にとって、この問題は厳しい体験であった。自らが官僚として前半生を過ごしてきただけに、国の計画を完全に覆すことは困難であり、当事者が話

し合い、歩み寄るしか方法がないことも理解していた。結果は久井が予想したとおりになったが、この問題に対する校友や学生の反応は久井の予測を超えたものであった。この問題は、久井に改めて大学経営の難しさ、複雑さを痛感させることになった。

#### 【写真】千里山キャンパスを通り抜ける名神高速道路

### 三、総合大学への飛躍

#### ・工学部創設

総合大学への道を模索していた本学では、医学部と工学部いずれを設置するかで議論がなされていた。昭和三十二年（一九五七）夏、久井はロックフェー  
ー財団の招聘によるアメリカ視察旅行に参加した。その旅行で知り合った他大学の参加者から、久井は工学部設置についての貴重なアドバイスを得た。帰国後、学長の岩崎卯一や工学部設置のプロモーター役を務める太田雞一教授（のち工学部長）らと協議した際、そうした経験が役に立った。

設置が決定した工学部は、昭和三十二年（一九五

七）九月二十七日に文部省へ申請がなされ、翌年四月から天六学舎で機械、電気、化学、金属の四学科によりスタートすることになった。

「技術革新」の時代的風潮のもと、政府は昭和三十一年度（一九五六）から私立大学への理科系教育設備補助金を創設し、昭和三十三年度（一九五八）からは新設の場合、補助率を三分の二に引き上げたが、本学工学部はこの適用第一号となった。

#### 【写真】アメリカ視察団の一行

#### ・社会学部の開設

昭和二十四年（一九四九）に発足した文学部新聞学科は当初、第一部・第二部あわせても学生数は四十八人にしか満たなかったが、昭和三十一年（一九五六）には七百三十五人に増加し、文学部の中で最大の学科に成長していた。こうした状況も反映して、情報科学時代に対応する新学部の設置が強く望まれることになった。

既存学部からの反対などで、久井をはじめ、理事

会は調整に苦勞したが、昭和四十一年（一九六六）八月九日、社会学部の開設を正式に決議し、九月二十九日、設置認可申請書が文部省に提出された。

本学六番目の学部として昭和四十二年（一九六七）

四月に誕生した社会学部は社会学専攻、マス・コミ、ユニケーション専攻、産業社会学専攻で構成され、その後、昭和四十八年（一九七三）四月に産業心理学専攻が新設された。

こうして本学は、以前より一回りも二回りも大きな総合大学に成長した。この飛躍は高度成長の追い風にもよるが、久井の鮮やかな舵取りの功によるところが大きい。

#### 【写真】完成間もない社会学部学舎

#### 四、創立一〇〇周年記念事業

久井は創立一〇〇周年を迎える八年前の昭和五十三年（一九七八）九月二十七日に「創立一〇〇周年記念事業準備懇談会」を発足させた。記念事業の骨子は、昭和五十八年（一九八三）十一月二十九日発

行の「関西大学通信一三二号」で発表されたが、久井は記念事業募金を組織的に推進させるため、総括責任者として募金委員長に就任し、陣頭指揮に当たった。

その募金をもとに、昭和六十一年（一九八六）十一月二日、大阪城ホールで盛大に挙行された一〇〇周年記念式典をはじめ、①一〇〇周年記念会館の建設 ②創立一〇〇周年記念セミナーハウス「高岳館」の建設 ③国際交流基金、学術研究助成基金、教育助成基金の設定 ④記念刊行物（『関西大学百年史』など）の出版と「内藤文庫」の設置等 ⑤記念行事（日・印共同学術調査）などが記念事業として実施された。

募金活動および記念事業を成功に導いたのは、久井をはじめとする関係者の努力に加え、校友会や教養後援会・千寿会など、オール関大の熱烈な支援がもたらした成果であった。

#### 【写真】一〇〇周年記念会館地鎮祭で鍬入れをする久井

【写真】日印学術調査第二次調査壮行会で挨拶を述べる久井

## 五、新しい世紀へ向けての将来構想

久井は創立百周年を迎える前から、本学が新しい世紀を迎えたあとの将来構想を練っていた。

その構想は、昭和五十八年（一九八三）十一月に具体的な形となって現れた。千里山、天六に次ぐ第三の校地として、高槻市が「北摂学術研究都市」構想を推進している地域の一面（四十四・八三ヘクタール）を買収すると発表したのである。その後、昭和六十三年（一九八八）四月三十日に新校地の造成工事が挙行され、平成三年（一九九一）三月二十五日に竣工式が行われた。

久井の時代を先取りする大学経営手腕は、高槻校地の取得でも遺憾なく発揮された。

## 【写真】高槻校地造成工事竣工式

## 六、略年表

展示ケースを挟んで掲げた壁面の中型パネル二枚では、教育にかける久井の情熱と、人情味あふれる細やかな心遣いを次のように紹介した。

## 中型パネル「大学と家庭をつなぐ『心のかけ橋』」

### 【解説】

今や他大学が目指す極めてユニークな組織となった関西大学教育後援会。その歴史は昭和二十二年（一九四七）六月にまで遡る。戦争で荒廃した学園の復興を支援する在学生の父母の組織として設立された。大学の復興期には数多くの施設を寄贈し、大学だけ



中型パネル「大学と家庭をつなぐ『心のかけ橋』」

では手が回らない施設や設備の整備を行った。さらに、周年の記念事業では基金を募集して大学に寄付をしたきた。

すでに六十年以上の歴史を誇る教育後援会の活動は、今なお広がりを見せるが、そうだった背景には長年、実務の中心にあった森本靖一郎幹事長（のち関西大学理事長）と、理事長としての久井の存在が大きかった。

教育という仕事は、学校と親とがしっかりと手を結びあつてこそ実があがる。教育後援会は、そのための「心のかけ橋」でなければならぬというのが久井の信念であつた。

そのため、久井は教育後援会総会だけでなく、地方教育懇談会にも必ず出席し、親たちに向かつて家庭教育の大切さ、親子の対話の重要性を説いた。ときには親を叱り、励まし、またあるときは親とともに哀しんだ。

家庭での親子の関係のあり方を端的に表現した「目をはなすな、手をはなせ」というキャッチフレーズは、自ら四男二女の父親である経験や心情に基づいた究極

の教育論だったのである。

【写真】教育後援会で挨拶する久井理事長

【写真】全国からの参加者で体育館が満員となった教育後援会総会

中型パネル「かまぼこ定期便」

【解説】

かまぼこ定期便とは、久井が毎年暮れに全職員へプレゼントしたかまぼこに由来する。久井が専務理事に就任した昭和二十七年（一九五二）から始められ、理事長となったのちも続けられた暮れの「風物詩」であつた。

昭和四十二年からは「挨拶状」も添えられるようになったが、「ご令室様」宛の書状には、毎年表現は異なるが、概ね次のような趣旨の文面が綴られた。

—恒例によりまして「僅少且粗品」なる蒲鉾を、ご贈呈申し上げます。ご笑納下さい。

私があなた様にお納め願う蒲鉾は、一カ年間ご苦





「幼少および青年期」（パネル四点）

パネル1 「浜っ子育ち」

【解説】

久井は明治三十八年（一九〇五）十二月二十一日、父治三郎、母リコの長男として大阪府泉南郡岸和田浜町（現在、岸和田市大手町）で生まれた。姉一人、弟二人の四人姉弟であった。浜町は海に面した漁師町で、生家は蒲鉾製造業を営んでいた。久井は浜辺で網曳きを手伝ったり、投げ釣りの遠投を競ったりして活発な少年期を過ごした。

【写真】 生家付近

【写真】 幼少のころ（祖母と姉）

パネル2 「関西甲種商業高校に学んで」

【解説】

久井が十一歳のとき、父親が大阪市南区の木津市場に店を構えたので、市内の木津第一尋常小学校に転校した。その後、関西甲種商業学校に進学した久井は、同級生より二歳年上で体格も大きかったため、クラス



小型パネル「浜っ子育ち」  
「関西甲種商業高校に学んで」

選挙で級長に選ばれた。この関甲時代には林弘高（元吉本興業社長）や田中久雄（元防衛政務次官）、辰巳柳太郎（のち新国劇の名優）という生涯の友人を得た。

【写真】 福島学舎

【写真】 関西甲種商業学校時代

パネル3 「相撲好き」

【解説】

関西甲種商業学校時代から始めた相撲を続けるため、子科でも相撲部に入部した。相撲部が黄金時代を迎えていたこともあり、久井は残念ながら選手にはなれなかった。学生時代には、相撲のほか、柔道や砲丸投げ

なども行っている。

【写真】相撲部時代（後列左から二人目）

パネル4「弁護士をめざして」

【解説】

久井は弁護士になることをめざして、昭和三年（一九二八）四月、関西大学予科から法文学部法律学科に進学した。在学中、大阪府立中之島図書館に通い詰め、二年生で高等試験司法科、三年生で同行政科に合格した。そうした偉業を成したにもかかわらず、友人たちが開催した「久井の高文合格を祝う会」で泥酔し、翌日の最終試験を受験できず、追試験による時期遅れの



小型パネル「相撲好き」  
「弁護士をめざして」

卒業になったというエピソードも残っている。

【写真】大学予科校舎

【写真】関西大学時代

「エリート官僚として」（パネル五点）

パネル1「警察官僚として」

【解説】

昭和六年（一九三一）四月、内務省に採用された久井は、翌年五月、早速地方に転属した。異動先は群馬県、所属は内務部であった。その翌年には警察部に転じ、以後、久井は主として警察畑で官僚としての経験を重ねることになる。そうしたなか、昭和九年（一九三四）十一月、天皇が乗る車（鹵簿<sup>ろぼ</sup>）の先導を間違え大問題に発展するという「鹵簿誤導事件」が起こった。久井は直接の責任者ではなかったが、そのときの教訓を自らの戒めとするため、終生剃髪で過ごした。久井の人生に大きな影響を与えた事件であった。

【写真】群馬県警察時代（左から五人目）



小型パネル「警察官僚として」  
「島根県社寺兵事課長」

パネル2 「島根県社寺兵事課長」

【解説】

昭和二十一年（一九四六）四月に内務省を退官するまで、十五年間に及ぶ官僚生活の大半を久井は警察官僚として送ったが、一時期、島根県官房主事兼人事課長兼社寺兵事課長を務めた。官房主事とは知事に直属する官房の長であり、また社寺兵事課長とは、県内の主要神社に勅使として参向するなど、神社の祭事と深いつながりを持つ役職であった。このとき島根県では「一県一社」とされる招魂社（護国神社）の立地をめぐる争いが起こっていたが、これに対して久井は「一県二社」案を作成し、内務省神社局に働きかけた。結

果、数少ない例外措置として、島根県では松江と浜田に二つの招魂社が認められることになった。神の国、出雲ならではの久井調停案であった。

【写真】立地の条件が瓜二つの松江招魂社と島根県招魂社

パネル3 「内閣情報局時代」

【解説】

戦況が厳しさを増す昭和十九年（一九四四）一月、久井は内閣情報局勤務となり、終戦まで一年七カ月の前半十カ月余りを出版課長、後半七カ月を新聞課長、接点の一月余りを出版課長と新聞課長を兼務して過ごした。出版課長時代には雑誌の廃刊問題に関わり、新聞課長時代には、新聞社が空襲に合っても、継続して新聞が発行できるよう、地方紙と中央紙が協力体制をとって非常事態に備えるという政策を推し進めた。久井はこの時期に多くのすぐれた新聞人や出版関係者と面識を得たが、それは生涯の大きな収穫となった。

【写真】三つの紙名が一緒に並んだ「新潟日報」の題号

#### パネル4 「転勤族」

##### 〔解説〕

エリート官僚の常であるが、久井のポストはめまぐるしく変わり、それと同時に勤務先も短期間で変わっていった。東京を皮切りに群馬、島根、東京、福岡、東京、千葉、東京、そして新潟と、十五年間に九回も住所が変わった。長くて四年、短いときは八カ月という「転勤族」であった。久井は、コト夫人との間に二女五男を設けたが、一人ひとり出生地が異なっていた。転勤の多い久井家ならではの特徴である。

##### 〔写真〕 家族とともに

##### 〔写真〕 昔のたたずまいを残す麹町区隼町の官舎

#### パネル5 「スポーツマン久井」

##### 〔解説〕

久井は肥満型ながら運動神経は発達しており、テニスやゴルフ、スキー、柔道、野球、水泳など、ひと通りのスポーツをこなした。警衛課長時代には役職上必修ともいえる乗馬に挑戦したが、騎馬警官が務まるほ



小型パネル「スポーツマン久井」  
「内閣情報局時代」

どに上達した。また、少年時代、岸和田で海に慣れ親しんだこともあり、水泳には自信があった。家族で海水浴に出かけた折などは、背中に子どもを乗せて泳いだこともあるという。

##### 〔写真〕 テニスを楽しむ

##### 〔写真〕 警視庁警衛課長時代、乗馬姿の久井（右から二人目）

##### 「転機」（パネル四点）

#### パネル1 「内務省退官」

##### 〔解説〕

敗戦直後、久井は新潟県警察部長に就任したが、わ



小型パネル「内務省退官」  
「公私ともに転換期」

ずか一カ月余りのちの昭和二十年（一九四五）十月四日にはGHQの職務罷免通達を受け、休職になった。

その後、自ら退官する翌年四月二十四日まで、公職から罷免された新潟県警関係者（二〇二名）の再就職の斡旋に尽力した。

【写真】 依願免官辞令

【写真】 新潟県警察部長時代の官舎

パネル2 「公私ともに転換期」

【解説】

昭和二十年（一九四五）九月二十五日、父治三郎の

急死を境にして、久井は公私ともに大きな転換期を迎えた。翌年十一月一日に久井は新潟弁護士会に弁護士登録をしたが、顧客が少なく、活動拠点を大阪に移した。そのかたわら、旧友と共同経営で久大紡績の社長を兼務した。その折、警察官僚時代の同僚で久大紡績の経営参画者から神戸の自宅を譲り受け、母親と同居することにした。久井はその後、死ぬまでそこで住ま

【写真】 永住の地、神戸の自宅

パネル3 「専務理事に就任」

【解説】

戦後教育改革の一環で、理事・監事選出の母体として評議員会を設け、これに教職員および卒業生の代表を加えて、運営にその声を反映させることを定めた私立学校法が施行され、本学の寄附行為も全面改正された。校友の間でその名前が知られるようになった久井は、昭和二十七年（一九五二）十月の評議員選挙で当選し、続く役員選挙で専務理事に選ばれた。白川朋吉

理事長の補佐役として母校経営の中枢に立つことになったのである。

### 【写真】評議員選挙の新聞広告

パネル4 「山上の垂訓」

#### 【解説】

専務理事に就任しても、久井は中央政界への進出という夢を捨て切れなかった。専務理事に就任して間もないある日、元学長で、恩師でもある岩崎卯一に呼び出された。岩崎は図書館前の高台で久井に、卒業後二十年も経っているにもかかわらず、施設などはほとんど増えていないと説き、関西大学の立て直しを久井に



小型パネル「専務理事に就任」  
「山上の垂訓」

願い出た。この岩崎の「山上の垂訓」は、久井に本学の経営に専念させることを決意させるきっかけとなった。

### 【写真】昭和二十七年四月ごろの千里山キャンパスの航空写真

#### 写真

「大学経営のトップとして」（パネル五点）

パネル1 「海外主要大学視察旅行」

#### 【解説】

久井は昭和三十二年（一九五七）六月から約二カ月間、ロックフェラー財団の招聘でアメリカへ大学視察旅行をした。大学行政に関するゼミを受講したのち、主要十七大学を訪問した。この旅行では、知識だけではなく、貴重な人脈も得た。その多くは、帰国後、それぞれの大学の経営責任者や私学団体の要職につき、わが国の大学行政で大きな役割を担った。本学の工学部開設にあたり、久井は旅行の最中、そうした人々たちから多くのアドバイスを得、学部創設の参考にしていく。





小型パネル「海外主要大学視察旅行」  
「創立100周年を迎えて」

【写真】 アメリカカ大学行政視察に出発する久井

【写真】 視察団の一行

パネル2 「私立大学の国庫補助促進」

【解説】

昭和二十年代後半以降、国の文教政策は国立大学重視の傾向にあったため、国立と私立との国庫補助には格差があった。私立大学財政の窮状による教育・研究の危機を憂慮して、全関西私立大学国庫補助促進同盟が結成され、久井は昭和四十一年（一九六六）九月、議長になった。その後、粘り強く人件費に対する助成

を要求した結果、昭和四十五年度予算に計上された。

久井が私立大学への国庫助成の道を拓いたと言える。

【写真】 全関西私立大学国庫補助促進同盟の議長として

パネル3 「創立100周年を迎えて」

【解説】

昭和六十一年（一九八六）十一月二日、全国各地や韓国、台湾からの校友とその家族など一三、〇〇〇人の参加者を迎え、澄みきった秋天のもと、創立一〇〇周年記念式典が挙行された。久井は式辞の中で関西大学一〇〇年の歩みを振り返り、この日を未来永劫への厳粛な接点と位置づけ、無限の可能性を秘めて大学の使命を果たす決意を披瀝した。久井の力強いことばは、参列者の心を揺さぶった。

【写真】 創立100周年記念式典で式辞を述べる久井

パネル4 「私学教育貢献の集大成」

【解説】

昭和六十一年（一九八六）十一月三日、久井は長年





小型パネル  
「私学教育貢献の集大成」  
「総合情報学部の開設に向けて」

にわたる私学教育への貢献により、秋の叙勲で勲二等旭日重光章を受けた。皇居での授与式で、久井は受章者を代表して天皇陛下にお礼のことを述べた。久井にとって、この日は人生最良の日であった。

【写真】勲二等旭日重光章を受けた久井

パネル5「総合情報学部の開設に向けて」

【解説】

第二世紀の関大作りに取りかかった久井には高槻キャンパスの造成や新学部の設置など、いくつかの課題があった。高槻キャンパスの造成は平成三年（一九九一）に完了し、同年三月二十五日に竣工式が行われた。

その後、総合情報学部開設のための施設が順次作られた。同年七月二日に挙行された創立一〇〇周年記念セミナーハウス「高岳館」の地鎮祭でも、いつもどおり久井は大きな声で鍬入れを行った。

【写真】高槻校地造成工事竣工式で挨拶する久井

【写真】創立一〇〇周年記念セミナーハウス「高岳館」

小型写真パネルの内容説明は以上であるが、簡文館耐震補強工事実施後、写真パネル展示台を一面あたり上下二枚のパネルが展示できる口の字型に変え、それを二基設置するよう変更したため、パネルのレイアウトもそれに合わせた。その結果、パネルを二枚割愛し、十六枚の写真パネルを展示することになった。割愛した二枚は、「エリート官僚として」の中のパネル4「転勤族」と「大学経営のトップとして」の中のパネル2「私立大学の国庫補助促進」の二枚である。

さらに、展示ケース内には久井忠雄をしのぶ次の品を展示した。

① 顔写真 久井忠雄

② 創立一〇〇周年記念式典ほかで着用したモーニング  
③ 愛用のゴルフ用品と優勝トロフィー

〔解説〕

久井は運動神経がよく、ひととおりのスポーツをこなしした。ゴルフも趣味のひとつであった。

④ 愛用のめがね

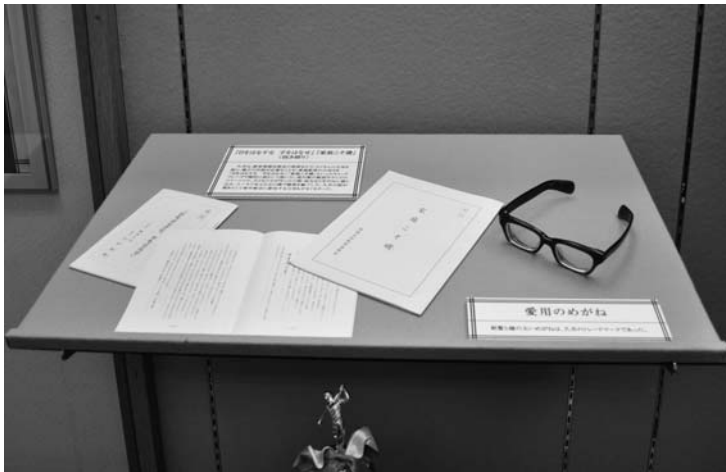
〔解説〕

剃髪と縁の太いめがねは、久井のトレードマークであった。

⑤ 『目をはなすな 手をはなせ』『家庭こそ礎』（抜き刷り）

〔解説〕

久井は、教育後援会総会の挨拶などで、たくさんの父母を前に、親子の対話が必要なことや、家庭教育の大切さを「目をはなすな 手をはなせ」「家庭こそ礎」といったキャッチフレーズで端的に表わして説いた。流行歌の歌詞やテレビのコマーシャル、子どもたちが作った川柳・俳句などを巧みに盛り込み、ユーモアあ



愛用のめがね、「目をはなすな 手をはなせ」「家庭こそ礎」（抜き刷り）

ふれる口調で聴衆を魅了した。久井の話が聞きたくて毎年総会に参加する父母も少なくなかった。

⑥ 創立一〇〇周年記念事業寄付者芳名録

⑦ 創立一〇〇周年記念事業・行事記録

#### 四 企画展を終えて

久井忠雄が亡くなって二十年が経つが、今なお、その人柄と活躍ぶりを記憶している人は多い。それだけ関西大学の歴史に残る人物であったといえよう。

毎春、新入学生への導入教育や自校教育の一環として、年史資料展示室の見学が実施されている。展示室に来た学生の中には、名神高速道路問題や工学部・社会学部の開設など、久井忠雄が今に残した業績に興味を示した人もいた。

見学に来たある教授は、次のような逸話を話してくれた。その教授が久井理事長に面談の約束を申し出た時、「それでは早朝七時にお会いしましょう」と言われ、当日は久井自ら関西大学会館の玄関で出迎えたそうである。面談内容の重要性を考慮して、人目に付かない時間帯を

指定されたのであろうと、当時のことを思い出しながら、久井の気配りについて話された。

久井忠雄にまつわる逸話には切りがなく、平成五年（一九九三）八月発行の『回想 久井忠雄先生』や平成十八年（二〇〇六）五月発行の『久井忠雄先生生誕一〇〇年 永遠の人』などにも数多く収録されている。

今回の企画展では、本学が取り巻く環境に対応し、創立一〇〇周年記念事業をはじめとする数多くの事業を成功させた久井の業績だけでなく、人となりも紹介した。一二五年に及ぶ関西大学の歴史の中で、在職二十八年間という最長不倒の理事長の足跡は、戦後の復興期から飛躍期、さらには拡充期へと続く大学の事跡とともに、今後も長く語り伝えていかなくはならないであろう。